

三拾萬石以上 金貳萬兩
 右之通拜借金可被仰付候。金子の儀は於大坂可相渡候。上納の儀は來五年は御用捨被成候間、來々寅年より五ヶ年賦可爲上納候。以上。

九月

附。病氣或は在邑の衆へは、御老中方へ家來呼寄被仰渡候。一、老中より被仰渡の事
 松平左近將監殿より大御目附衆へ書付御渡、萬石以下の衆へ被相觸候紙面の寫如左。

西國・四國・中國筋作毛蟲付損亡の輩、拜借の儀被仰出候。依之萬石以下の面々も、領地蟲付及損亡半物成以上不足の分へは、御吟味の上拜借の御沙汰可有之候。分知内分の面々御吟味の上、及御沙汰間敷候。
 右之通萬石以下へ可被相觸候。

三百石より四百石餘迄 金七拾兩
 五百石より九百石餘迄 金百兩
 千石より千九百石餘迄 金貳百兩
 貳千石より貳千九百石餘迄 金四百兩

三千石より四千九百石餘迄 金六百兩
 五千石より九千九百石餘迄 金千兩
 右之通拜借被仰付。上納の儀は來五年は御用捨被成候間、來々寅年より五ヶ年賦に可爲上納候。以上。

一、萬石以上へ被相觸候事
 今年は關東筋作毛宜方の由相聞候間、先達て申通し候通、彌置米の儀可成程は多可被申付候。以上。

子 十月 大目付
 右の通萬石以上へ可被相觸事。

一、室鳩巢中秋詩その他

中秋詩

秋風千里起。吹月落欄杆。未與潮俱滿。暗兼露共團。明悲衰鬢白。光覺敝衣寒。方爲佳氣近。幾回仰首看。右十三夜月
 月鄰三五夕。今夜是先容。香動雲中桂。露明屋下松。詩成堪自悅。杯盡共誰重。祇看秋光好。還悲老病逢。右十四夜月
 十五夜陰翳不見月。三首

三五清容寂寞收。古來名下自難留。蒼梧色慘雲低野。丹桂香沈月暗樓。露白猶餘淵客淚。河傾無奈杞人憂。如何多病

多愁日。空惜一年一夜秋。其一 前五日。上皇詔至。故第三句及此。

萬里長流小石灘。水光黯澹夜闌干。露從烏鵲橋邊下。月唯關山笛裏殘。爽氣城高金析響。幽棲地僻草堂寒。腐儒報國最無狀。一任青雲攀桂難。其二

衰鬢蕭々烏角巾。嫦娥孤負倚闌人。江心忽沒秦皇鏡。雲路深埋漢使輪。燈下無情詩賦懶。樽前有興酒杯親。候蟲似戀今宵月。唧々未休繞舍頻。其三

堂成初對月

新築小堂枕碧流。捲簾千里暮雲收。嫦娥水近雙々見。楊柳風寒寂々秋。多病關心悲舊事。故人入夢憶同遊。三年患瘵今忘記。欲泛仙槎不自由。

八月十五夜の作、其節其元へ可遣と存、門人の中へ頼候て爲書置候處、婚儀の前後取込候故進不申、延引の事ながら此度進候。只今はかの假名物自身に調候故、其に取かゝり罷在候。拙者事寒氣故、手足の痛は別てあしく致難儀候得共、氣配食事いさゝか無替儀、右かき物の透には講談も致し候。此躰にては當年も可致存命候。されども去年よりは又よほど衰を覺候。餘り久しきものには無之候。頃日細

井次郎太夫に頼、歸去來賦をかきもらひ申候。見事に調申候。此賦平生好と見申候故細井に頼申候。聊乘化以歸盡樂夫天命復爰疑。と申二句にて留候事、可感慨事に候。以上。

十月十九日

一、室鳩巢近情の儀小寺遊路來狀

當十五日駿河臺へ拜謁候。俄成寒氣故にも候哉、御痛甚不宜候。乍然御氣分御食事等は少も御替無之、此間も講書被成候。上下を人に爲御着被成候て、兩人に扶られ、外の間へ御出候て講説被遊候處、何程久敷被成御座候ても少も御退屈不被成候。一兩日以前も忠三郎殿御亭主にて、御舊知の方々森厚齋左衛門殿土屋平三郎殿今一人は小普請衆の由。御出候故表へ御出、晝より學談又は雜話、御講書も所望にて御よみ被成、夜中迄被成御座候處、聊も御困倦不被成候。か様の儀に被成御座候得ば、いか様御精神は慥成所有之と御覺被成候旨御物語に候。見請候御様子も、随分御強健に被爲見候。駿臺雜話も申上候て全部拜讀仕候處、扱々面白もの、親切成儀共、早々世に流布候様に仕度物に存候段申上候へば、御初意は成程其通に候處、只今は進奏申趣に成候に付、先是を第一に御謄寫